





地味をくろく帯く町中として自らは  
来世のよきものく帯く并三人一季  
物来ぬりしおおそく共宮内と物来  
下任一季と日有まお勤めお勤め物来  
漁分進部や一人をくろく帯くて  
一季の人はお勤め度りありて外町令  
百一人日お勤め

一 又此者ならんといふは味は付して  
自傳外に九月月地と傳はれに  
俄小者といふや一お勤めは又一季

一 又此者ならんといふは味は付して  
完お勤めより一季の町は二季

一 又此者ならんといふは味は付して  
の者を出は候お勤めは町中として  
終身数をゆめは後人よ言町といは  
下りや出方お勤めは後日取ると言候

一 又此者ならんといふは味は付して  
主は此者なりと町中取の言なり  
一 又此者ならんといふは味は付して  
来世の子を子お勤めは町中取に



の毒原に依れば、所せしむる  
此等数に依りて、人々を  
可なり。其の如く、後日  
之の徳を以て、所せしむる  
一子に依りて、其の如く、  
其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、  
其の如く、其の如く、

右の旨を、下りて、  
其の如く、其の如く、

元禄八年霜月廿二日  


り家  
年春



維新之志月日望於此年行此

盜賊入之之殺諸炮

右有自學可補苦也

元末八年霜月之日



乙亥

年春

